Tulips University of Tsukuba Repository

アレクサンドリアのクレメンス『救われる富者とは誰であるか』全訳【改訂版】

著者	秋山 学
雑誌名	文藝言語研究. 文藝篇
巻	67
ページ	51-87
発行年	2015-03-31
その他のタイトル	Clemente Alessandrino, Quale ricco si puo salvare? (traduzione giapponese, versione riveduta)
URL	http://hdl.handle.net/2241/00124338

アレクサンドリアのクレメンス
『救われる富者とは誰であるか』
―全訳―
【改訂版】

秋　山　　学

初期ギリシア教父の一人，アレクサンドリアのクレメンス（150－215）の著作をめぐり，筆者は本学の紀要を借りてその全訳作業を進めてきた．すでに『プロトレプティコス』（「ギリシア人への勧告」；全１巻），『パイダゴーゴス』（「訓導者」；全３巻），および『ストロマテイス』（「綴織」；全８巻）に関しては訳出を終えている[1]．このほかに伝わるクレメンスの著作としては，『救われる富者とは誰であるか』（*Quis dives salvetur?*），『テオドトスの著作からの抜粋』（*Excerpta ex Theodoto*）そして『預言書撰文集』（*Eclogae propheticae*）が遺されている．このうち，本稿では『救われる富者とは誰であるか』の拙訳（改訂版）を公にしたい．

この著作に関しては，すでに 1995 年 2 月の段階で，平凡社より刊行された『中世思想原典集成』第１巻「初期ギリシア教父」の中に，拙訳によるものが収められている[2]．もっとも，さきに『ストロマテイス』第５巻の改訂版を公にした際と同様，平凡社から上梓した際は，クレメンスの全貌を明らかにするという趣旨の訳業ではなかった．したがってほぼ 20 年を経た現在，あらためてクレメンスの著作の全容を電子版で公開するという目的の下に，本学紀要に拙訳を載せることにしたものである．これは筑波大学附属図書館が，わが国において電子化（リポジトリ）の作業を最も先端的に進めている機関でもあり，クレメンスの全著作を電子版で閲覧できるように努めることにも意義を見出せようと考えたためである．もっとも，まだ随所に誤りは散見されるため，教文館版の拙訳によるアレクサンドリアのクレメンス著作集全巻刊行の時点までに，更なる改善と注の充実を図るつもりである．

邦訳に際し，底本としてはオットー・シュテーリン（Otto Stählin，1868－1949）の校訂になる校訂版テキスト（*Stromata Buch VII und VIII ; Excerpta ex Theodoto ; Eclogae Propheticae ; Quis dives salvetur ; Fragmente* / Clemens Alexandrinus

; herausgegeben im Auftrage der Kirchenväter-Commission der Königl. Preussischen Akademie der Wissenschaften von Leipzig: Hinrichs, 1909; Die Griechischen christlichen Schriftsteller der ersten drei Jahrhunderte; Clemens Alexandrinus, Bd. 3）を用いた．なおルートヴィヒ・フリュヒテル（Ludwig Früchtel）らの改訂になる 1970 年の第 2 版については参照していないが，典拠箇所指示の充実が図られたものと思われるので，教文館版（「キリスト教教父著作集」）刊行のための見直し作業の際に活用したい．近代語訳としては，ロエブ叢書所収のバターワースによるもの（Clement of Alexandria, translated by G. W. Butterworth, Cambridge/London, 1919）を参照した．

序（1－3）．

追従ではなく，祈りと教化が富者を救うこと（1）．

1.1）富裕な人に賞賛の言葉を贈るような人々は，人にへつらう不自由な者と判断されて当然だとわたしには思われる．なぜなら彼らは，大きな報酬を期待するが故に，何ら感謝に値しないことを感謝に値することのように見せかけたいと望んでいるからである．だがそればかりではない．むしろ彼らは不敬で企みを抱く者たちと見なされるべきであろう．2）まず不敬であるというわけは，「すべてのものは神から出て，神によって保たれ，神に向かって」おり（ﾛｰﾏ 11,2），神が唯一完全にして善き方であるにもかかわらず，彼らが神を讃え神に栄光を帰するのを怠り，〔財産という〕神からの賜物を，救いのない泥だらけの生活に翻弄されているような，総じて神の裁きを被っている人に帰しているからである（※ここまでバターワースの提唱読みに従う）．3）次に企みを抱く者だというわけは，獲得したものの余剰それ自体が，十分になると霊魂を弛緩させ腐敗させ，そこを通ってこそ救いを手にすることができる道から外れさせるからである．また彼らは，無制限に賞賛を受けることへの快楽をちらつかせつつ，富裕な人々の思慮に対してさらに衝撃を加える．そうしながら彼らは富者に対して，富者が驚嘆される理由となる富以外は，すべて軽蔑するように仕向けているのである．実際，彼らは諺で言われているように「火の上にさらに火を運び」（ﾌﾟﾗﾄﾝ『法律』666A），傲慢に傲慢を重ねさせ，富にかさを増す．その富は本性的に重いけれども，さらにその上に重い重みを重ねる．むしろその重みは危険で死をもたらす病として，取り除き軽減すべきである．というのも自らを高め，大いなるものとする者には，逆に卑しきものへの転化と

墜落が待ち受けているからである．これは神の言葉が教えているとおりでもある（ﾏﾀｲ 23,12）．4）わたしには，富める人々に対して卑劣な癒しを施し，悪意をもってほめそやすよりは，彼らと共に生の重荷を担い，また彼らのためにあらゆる手だてを尽くして救いの手を差し延べるほうが，遙かに人間愛に満ちているように思われる．それはまず，われわれが神に懇願することによってなしうるであろう．神は自分の子供たちに対して，賜物を必ずまた快く与える方であるから．あるいは救い主の恵みに頼り，言葉を通して彼らの霊魂を癒すことでなしうるであろう．こうしてわれわれは彼らを照らし，真理の獲得に向けて導くことができよう．というのも真理に到り，善き業によって輝きを得た者のみが，永遠の生の重みを取り去りうるだろうからである．5）また，祈りも生の最後の日にまで及ぶ力強く輝かしき霊魂を必要とし，生活のあり方も，救い主のすべての掟を満たそうとする高貴で堅実な態度を要求するのである．

富者が救いを断念する理由（2）．

2.1）しかしながら富める人々の救いが，財産を持たない人々の救いよりも困難であるように思わせる理由は，単純ではなく多様であるのかも知れない．2）というのもある人々は，主の声を直ちに喜んで聞く．なぜならラクダが針の穴を通る方が，富者が天の王国に入るよりも容易だからである（ﾏﾙｺ 10,25）．彼らはもはやこの世に生きることを諦めたかのように自らに対して投げやりで，この世のすべてを喜び，この世での生が唯一自分たちに残された生であるかのようにそこにしがみつき，来世への道からは遠く離れ，主や師〔キリスト〕が誰を富者と呼ぶかということや，どのようにすれば人間には不可能なことも可能になるかといったことを，もはやあれこれと詮索することはしない．3）また，こういったことを正しくまた的確に理解してはいるものの，救いにつながることどもを軽んじ，待ち望んでいることがらのために必要な準備を備えることをしない人々もいる．4）わたしが言っているのは，救い主の力と輝かしい救いに気づいている富者たちのことであって，真理に与かっていない者どもに関しては，わたしの念頭にはない．

キリスト者にとって，富者の教化は義務であること（3）．

3.1）さて真理を愛し兄弟を愛する者は，救いに招かれている富裕な者たちに対して，我が身を顧みない傲岸な態度をとってはならないし，また逆に自分の利益を期待して彼らに追従するようなことがあってはならない．まず初めに

言葉でもって，彼らからその虚しい不安を取り除いてやる必要がある．そして主の言葉を必要に応じて解説することにより，もし彼らが主の命令に従うなら，天の国を相続する権利が彼らから奪い取られはしないということを説かねばならない．2）しかる後，彼らが恐るべきでない恐怖に脅えているときには，救い主が意志ある者どもを喜んで受け容れるということを忠告すべきである．そのときには同時に，どのようにしてまたいかなる行為と態度によれば希望に与かることができるかに関して，前もって示してやり教示してやるのがよい．それは，希望が彼らの手に届かないものとなったり，あるいは逆にいとも簡単に手に入れうるものとなったりはしないということを言うためである．3）ここで，われわれもわずかなもの，はかないものをそれぞれ大きなもの，不滅のものと比較することができるように，この世のことどもに富んでいる者は，陸上競技者の場合を例にとり，上で述べたことを自分にことかけて考えてみたまえ．4）富める者のうちある者は，勝てるということや栄冠を手中に収めることができるということに関して希望を失い，初めから競技に参加することすらしない．その一方である者は，考えのうちでは上のような希望を抱きながら，適切な努力，鍛練，食料を身につけることをせず，栄冠を得ることができずに希望を失ってしまう．5）それと同じように，地上で〔富という〕服を身にまとっている者は，自らが救い主の最高の報奨から除外されているとは思わないようにするがよい．もし真に信心深く，神の人間愛をよく理解しているのであれば．けれどももし，なお鍛練に励まずまた報奨を目指して競技することもせず，戦わずまた汗を流すこともしないままでいる者は，不死性という栄冠にあずかる希望はないものと思うがよい．6）むしろ自らを鍛練者である御言葉にさらし，審判者であるキリストの許に置くがよい．彼の食物と飲み物は主の新しい契約として，鍛練は命令として，美しき態度は優美さまた飾りとして準備されていると考えるがよい．愛，信仰，希望，真なる認識，公正さ，柔和，堅忍，貞潔も同様である．そして最後のラッパが走路のゴールを知らせ，この世という言わば競技場からの出立ちを告げるとき，彼は勝利者と認められて堂々と審判者の前に立ち，天上の祖国に適う者とされ，その故国に向けて，栄冠を帯び天使の布告とともに帰還するのである．

第１部.「あなたの持ち物を売り払え」という主の言葉の意味について（4－26）.

神の力添えを願う祈り（4.1－3）.

4.1）では，これから本題に入ることにしよう．われわれに対して救い主が，兄弟たちをまず希望に向け，次いで希望の成就に向けて，真理，摂理に適ったこと，救いを提供できるように導きたまわんことを．2）神は，求める者には恵みを与え，願う者には教え，無知を解き，絶望を取り払う．そして富める人々に関してもやはり同じように，その立場を理解し確かな忠告を与えてくれるような言葉を提示しているのである．3）というのも，やはり御言葉そのものに耳を傾けるほど確かなことはないからである．それは福音に含まれているもので，今までわれわれが十分に検討せず，幼さ故に誤って理解していたために，われわれを困惑させてきたものである．

『マルコ福音書』10,17－31「富める若者」の物語（4.4－10）.

4）イエスが旅に出ようとすると，ある人が走り寄って，ひざまずいて尋ねた．5)「善い先生，永遠の生命を受け継ぐには，何をすればよいでしょうか」．イエスは言った．「なぜわたしを〈善い〉と言うのか．神おひとりの他に，善い者はだれもいない．〈殺すな，姦淫するな，盗むな，偽証するな，奪い取るな，父母を敬え〉という掟をあなたは知っているはずだ」．6）すると彼は「先生，そういうことはみな，子供の時から守ってきました」と言った．イエスは彼を見つめ，慈しんで言った．「あなたに欠けているものが一つある．行って持っている物を売り払い，貧しい人々に施すがよい．そうすれば，天に富を積むことになる．それから，わたしに従うがよい」．7）その人はこの言葉に気を落とし，悲しみながら立ち去った．多くの富を持っていたからである．8）イエスは弟子たちを見廻して言った．「財産のある者が神の国に入るのは，なんと難しいことか」．9）弟子たちはこの言葉を聞いて驚いた．イエスは更に言葉を続けた．「子たちよ，神の国に入るのは，なんと難しいことか．富者が神の国に入るよりも，らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」．弟子たちはますます驚いて，「それでは，だれが救われるのだろうか」と互いに言った．イエスは彼らを見つめて言った．「人間にできることではないが，神にはできる．神はなんでもできるからだ」．10）ペトロがイエスに，「このとおり，わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました」と言い始めた．イエスは言った．

「はっきり言っておく．わたしのためまた福音のために，家，両親，兄弟，財産を捨てた者はだれでも，それを百倍受けることであろう，今この世で迫害を受けながら，畑，財産，家，兄弟を有したところで何になろうか．来たるべき世での生命は永遠のものである．しかし先にいる多くの者が後になり，後にいる多くの者が先になるであろう」（ﾏﾙｺ 10,17－31）．

福音の言葉をより深く理解することの必要性（5）．

5.1）これらのことは『マルコによる福音書』に記されていることである．もっとも他のすべての福音書においても，おそらくは少しずつ個々の言い回しにおいて違っている点があるにせよ，みな一致して同一の意味を伝えている．2）ここでは次のことを明確に知る必要がある．すなわちそれは，救い主が何ら人間的な仕方でではなく，すべてを神的かつ神秘的な知恵に基づき，自分の弟子たちがこの言葉を肉（の思い）によることなく受け取るように，と教えているのだということである．そこで，これらの言葉に隠された意味を，相応しい探究と理解によって検討し学び取らねばならない．3）というのも主自身によって，弟子たちのために分かりやすく説明されたように見えることがらが，実は今なお，主の比喩を以て語られたことに劣らないばかりか，むしろそれに勝る注意深さを必要とするように思われるためである．これは，その御言葉のうちに潜む意味が限りなく深遠だからである．4）あるいはまた，弟子たちの限られた交わりの中で，あるいは主によって「御国の子ら」（ﾏﾀｲ 13,38）と呼ばれている人々に対して，主自身により説明されているように思われる御言葉は，一層大いなる省察を必要とするからである．それらの御言葉は，実に単純な形で述べられているように見えるし，それ故に聞いている人々からは全くその意味を質されることがない．けれどもそれらは，救いという目的全体にとって極めて重要であり，しかも驚くべき天上的な意味の深みに包まれている．それゆえ，表面的な字義に基づいてその意味を受け取るのは相応しくない．むしろ他ならぬ救い主の霊と，その語られ得ぬ意味に向けて，知性を集中させることが肝要である．

キリストは人間の師であること：『マルコ福音書』10,17 の解説（6）．

6.1）というのも，われわれの主にして救い主なる方は，自らにとって最も相応しい問い掛けがなされるのを喜ぶからである．すなわちその問いとは，生命である方が生命に関して問われ，救い主が救いに関して問いかけられ，伝え

られる教えの眼目について教えの師が尋ねられ，真なる不死性に関して真理である方が問いただされ，父の言葉に関して御言葉が尋ねられ，完全な休らいに関して完全な方が問われ，堅固な不滅性に関して不滅なる方が問われる問いなのであるから．2）主は，自らがこの世に下ったことの意味について問われ，自らが教育し，教え，与え尽くすことどもについて問いを受ける．それは主が，福音の意図するところは永遠の生命を賜物として授けるところにあるということを示すためであった．3）その際に主は神として，これから自分が尋ねられること，そしてこの青年が自分に答えようとすることを予見していた．というのも預言者中の預言者，すべての預言者の霊の主よりも偉大なるものはいないだろうからである．4）さて，まず主は「善き方」と呼ばれた．そこで主は，この最初の言葉そのもののうちに手がかりを見出し，教えを始める．そして弟子を善にして第一の，そして唯一なる永遠の生命の与え主へと向ける．この生命とは，子が父から受けてわれわれに与えるものである．

あらゆる教えのうちで最も偉大かつ重要なもの：永遠にして善なる神の認識（7）．

7.1）こういうわけで，生命に関わる教えのうち最大で最も肝要なものとは，永遠にして永遠性の与え手，第一にして至高，一なる善き神を知ることである．このことを，初めからたがうことなく霊魂のうちに留めなければならない．神は覚知と認識とによって捉えることができる．2）というのも神に関する知とは，不変にして揺らぐことのなき根拠，生命の礎だからである．この神とは真に存在する方であり，存在性すなわち永遠性を与える方である．存在性と存続性とは，この方から他の諸存在に与えられる．3）なぜなら神に関する無知は死であるのに対して，神に対する知識，親しさ，神への愛，そして神に似ることのみが生命だからである（ﾌﾟﾗﾄﾝ『ﾃｱｲﾃﾄｽ』176b）．

「神に対する知識」に基づく主の教え（8.1）．

8.1）そういうわけで，真なる生命を生きようと欲する者には，まずこの神を知ることが勧められる．この神とは「子および子が啓示するであろう者を除いては，誰も知ることのない」（ﾏﾀｲ 11,27）方である．次いでこの方のあとに学ぶべきなのは，救い主の偉大さ，その恵みの新しさである．なぜなら実に，使徒によれば「律法はモーセを通じて与えられたが，恵みと真理はイエス・キリストを通じてもたらされた」からである（ﾖﾊﾈ 1,17）．また，信仰深き「仕

える者」〔モーセ；ﾍﾌﾞﾗｲ3,5－6〕を通して与えられたものと，真なる子によってもたらされたものとは，等しくないからである．

モーセの律法はキリストの恩寵の準備であること（8.2－9）．

2）であるからもし，かのモーセの律法が永遠の生命を与えるのに十分であるのならば，救い主自らが到来し，われわれのために，誕生から十字架（「しるし」）に到るまで，受難を経て人間性を悉く体験したことは意味のないものになることであろう．また律法の掟をすべて「幼い頃から」守り，跪いて不死性を他人に願い求めたこの青年も意味のない者となることであろう．3）というのもこの青年は，律法を満たしてきたというばかりではなく，その幼少の頃から変わることなくそうしてきたからである．というのも，若き情念や生々しい怒りや金銭愛が産む不正を生じさせないような輝かしき賜物があれば，それよりも偉大なるものが何かあるだろうか．だからもし誰か，若気の跳躍や年齢ゆえの熱い思いのうちにありながら，成熟しまた年齢よりも長じた考えを致す者があったならば，彼は驚くべき秀でた，思慮において熟年の域に達した競技者である．4）だがここに登場する青年は，正義に関して欠けている点は何もないが，生命そのものが自らには欠けているということをはっきりと自覚していた．それ故に彼はこの生命を，ただ一人それを与えることのできる方に求めたのである．そして彼は律法に関しては雄弁に語るが，神の子には嘆願する．5）この青年は「信仰から信仰へ」（ﾛｰﾏ1,17）移ったわけである．彼は，言わば律法のうちにあって翻弄されたために，危難故に停泊地を求める者のように，救い主の許へと停泊するのである．

9.1）けれどもイエスは，律法に記されていることを完全には充たしていないからといってこの青年を咎めることはしなかった．むしろイエスは彼を慈しみ，彼が学んだ従順さを高く評価した．しかし同時にイエスは，彼が永遠の生命に到るには不十分であると言った．それは，彼が完徳を充たしておらず，律法の実行者ではあっても真なる生命に目覚めていないためである．2）なるほど「律法を満たすこと」もまた善い．誰がそうでないと言おうか．この掟は聖なるものなのだから（ﾛｰﾏ7,12）．けれども律法の掟とは，恐怖と準備的教育を伴う一種の鍛練に過ぎない．つまり，イエスの教える掟の遵守という頂きと恵みにまで（ｶﾞﾗﾃﾔ3,24）導く役割しか持たないものなのである．しかしキリストは律法の完成であり，キリストとは「信じる者すべてに義をもたらすため」の方である（ﾛｰﾏ10,4）．キリストは，父の御旨を果たす者たちを「仕え

る者」〔モーセ；ﾍﾌﾞﾗｲ 3,5－6〕と同じく「仕える者たち」にするのではなく，子供たち，兄弟，共同の相続人とする方なのである（ﾛｰﾏ 8,14－17）．

道徳的生活の前提としての人間の自由意志：『マルコ福音書』10,21 の解釈（10）．

10.1）「もしあなたが完全な者になることを望むのであれば」（ﾏﾀｲ 19,21）．つまり青年はまだ完全な者ではないのである．というのも完全より完全なものはないからである．そして「もしあなたが望むならば」という言い方は神に相応しいものである．この言い方でイエスは，自らが語りかけている者の霊魂の自発性を明らかにしているのである．なぜなら選択は自由なる人間に委ねられたものであり，恵みは主たる神の側にあるからである．2）しかし主は望む者，努力を惜しまない者，そして必要とする人々には与える．これは救いがそうして彼ら自身のものとなるためである．というのも神は強いることはしない．なぜなら暴力は神と敵対するものだからである．むしろ主は探す人々に与え，求める人々に提供し，叩く人々に開ける（ﾏﾀｲ 7,7）．3）だからもしあなたが望み，もし本当に希望し，あなた自身を偽らないのであれば，あなたに欠けていることを獲得するがよい．「あなたには一つのことが欠けている」（ﾏﾙｺ 10,21）．一つのこと，主自身のこと，善きこと，すでに律法を超越していることが．それは律法が与えうるものではなく，律法に含まれているものでもなく，生ける人々に固有のものである．4）律法の掟を悉く「幼い頃から」（ﾏﾙｺ 10,20）満たし，過度に自らを誇ったこの青年には，この一つの事柄，すなわち救い主のみが授ける教えを，彼が求めていた永遠の生命を得るためであっても，それ以外のものの総体に付け加えることはできなかった．この青年は気落ちしてその場を立ち去り，請い願っていた生命の教えに心傷めたのである．5）というのも彼が求めていたのは，彼自身が言っていたような真なる生命ではなかったからである．むしろ彼は，善き意図を有しているような外見をまとっていただけであった．それ故彼は，多くのことに囚われることはできたが，一つのことすなわち生命の業を完成するための能力も意志も，力も有していなかったのである．6）ちょうど〔マルタとマリアの物語の中で〕（ﾙｶ 10,38－42），姉マルタが，自分は多くのことに気忙しく取り乱し，給仕に心騒がせているにもかかわらず，妹マリアは「仕えることをなおざりにし，主の足元に座って学びの時間を費やしている」と言って妹を責めたのに対して，主が「あなたは多くのことを思い煩っている．だがマリアは善い方を選んだ．だからマ

リアからそれを奪い取ってはならない」とたしなめたのと同様である．7）それと同じように，この青年に対しても主は，多忙な雑事からひとまず離れ，一つのこと，すなわち永遠の生命を与える方の恵みに専心し，心して注意を向けるように命じたのである．

「あなたの持ち物を売り払え」という言葉の意味について（11－19）．

あ）外的な財産放棄の命令ではないということ（11）．

11.1）では，この青年を逃避させ，師，嘆願，希望，生命，それまでの労苦から逃げ出さしめたのは，一体何であったろうか．それは「あなたの持ち物を売り払え」（ﾏﾙｺ 10,21）との言葉である．2）これは一体どういう意味であろうか．それは，ある人々が安易に理解しているような「今ある財産を売り払って金銭から離れよ」という命令ではない．むしろこれは金銭をめぐる思い，財に向かう共感，過度の欲求，金に関する恐れや病的感情，思い煩い，生命の種をつみとる生の刺を霊魂から取り払うようにとの命令なのである．3）なぜなら，金を無為に投げうてというのは，偉大でも羨ましいことでもなく，生命の言葉に関わることでもないからである．というのもそういうことであれば，何であれ何処にも有することなく，孤独で日々の食べ物をも乞う者たち，道端に見棄てられた乞食，神や神の正義を知らず，極度に貧窮し生をどうにもやり繰りできぬ者，最低限の物にも事欠く人々が最も幸いにして神に愛され，唯一永遠の生命を有しているということになるであろう．4）また，富を投げうって貧しき人々或いは祖国のために施せというのは何ら目新しいことではない．これは救い主の到来以前にも多くの人々が行ってきたことである．その中のある人々は暇つぶし或いは死した知恵のため，またある人々は虚しき名声や偽りの栄光を求めてそうしたのであった．例えばアナクサゴラス（前 500－428）やデモクリトス（前 460－361），クラテーテス（ｸﾗﾃｽ，前 320 頃）たちである．

い）この教えは霊魂が情動から解放されることを表す勧告であるということ（12）．

12.1）では救い主は，一体何を新しく神に固有なこととして告げたのであろうか．また彼が告げた，ただそのことのみが生命をもたらし，以前の人々が救われなかったこととは何であったのだろうか．もし彼が「新しき創造」（ｶﾞﾗﾃﾔ 6,15；2 ｺﾘﾝﾄ 5,17）たる神の子として，何か特別なことを告げ知らせまた教えたのであれば，彼は他の人々が為したような目に見えることを命じたのではなく，この言葉によって，何か他のより偉大で神的，より完全な行為を表そうと

したはずである．すなわちその行為とは，霊魂そのもの，心的状況を，そこに伏在する情念からはぎ取ること，そして思慮とは無縁な根を切り取って投げ棄てることなのである．2）というのもこの教えは信仰者に固有で，救い主に相応しい教えだからである．なぜなら救い主以前の人々は，なるほど外的なことどもを軽んじ，財産を棄てて売り払いはしたが，わたしが思うに，その霊魂の情動に関して彼らはますます増長したように思われるからである．というのも彼らは，自分自身が何か超人的なことを行なっているかのような気になって，倨傲，虚偽，虚栄に陥り，他の人々を軽蔑するようになったのである．3）ではなぜ救い主は，永遠に生きることを望む人々に対して，彼自身が約束した生命に対して損害と損失を及ぼすようなことを勧告するのであろうか．4）その理由は，次のような別の可能性もありうるからである．つまり，ある人が財産を投げうちながらも，すでに根づいてしまった金銭に対する欲求や衝動が，なおいささかも減じることなく潜在し息づいていたとしよう．彼は財産を用いることを放棄したものの，困窮に陥ると同時に打ち捨ててしまった財を渇望し，二重の苦悩に苛まれることになる．すなわち生活の支えが欠如することと，自らの行為が悔やまれ続けることによってである．5）つまり，生活するために不可欠なものを事欠く者が，いかなる方法でまたどこから調達するにせよ，その物資を手に入れようと忙殺されるあまり，思いにおいて打ちひしがれ，よりすぐれたことを考えることからは遠ざかるということは，必ずや起こり得ることなのである．

う）この箇所の字句通りの解釈は，主の他の教え・掟と齟齬を来たすこと（13）．

13.1）それに対して，今述べたのと逆の事態はどれほど有益なことであろうか．すなわちある人が自ら十分なだけの蓄えを保持していて，財に関して窮状に陥ることはなく，また援助を必要とする人々には救いの手を差し延べうるというのは．というのも，もし誰一人として何も財を有しないという状況に陥ったならば，人々の間にいかなる分かち合いの余地が残されうるであろうか．2）ところで次に引く教えは，他の数多き高貴な主の教えとは，はっきりと対立しまた齟齬を来すように思われるものではないだろうか．3）「不正にまみれた富で友だちを作るがよい．そうしておけば，金が無くなったとき，あなたがたは永遠の住まいに入れてもらえる」（ﾙｶ 16,9）．「富は天に積むがよい．そこでは，虫が食うことも錆び付くこともなく，また，盗人が忍び込むことも盗み出すこともない」（ﾏﾀｲ 6,20）．4）われわれがみな，財や物資にこと欠いてい

たとすれば，誰がどのようにして飢えている人を養い，渇いている人を潤し，裸の人に服を着せ，家のない人を集めることができようか（ﾏﾀｲ 25,35－36）．たとえそういった施しを行わない者に対して，主が止むことのない火や闇〔による罰〕をもって威嚇している（ﾏﾀｲ 25,41－43）としてもである．5）実際主自身も，富裕なザアカイ（ﾙｶ 19,5）やレビ，徴税人マタイからもてなしを受けた（ﾏﾙｺ 2,15）．けれども主は彼らに対して，その財産を放棄するようにと命ずることはなく，正しき財の用い方を讃え，不正な財貨については触れずに「今日，救いがこの家を訪れた」（ﾙｶ 19,9）と告げた．6）であるから，主が彼らの金銭の使い方を誉めるあり方としては，次のようなあり方が想定されている．つまり主は財の剰余でもって，渇ける人を潤し，飢える人にパンを与え，家のない人を歓待し，裸の人に着せるべく分かち合えと命じているのである．7）もし，なにがしかの財なくしてはこういった分かち合いを果たすことができず，主が単に金銭を手放せと命じているだけならば，主は次のようなこと以外の何を勧めていることになるのであろうか．すなわち同じものを与えかつ与えず，養いかつ養わず，歓待しかつ門を閉ざし，分かち合いかつ分かち合うことをしないようにと命じていることになるのである．これは何にもまして不合理なことであろう．

え）神から人間のために与えられた財は，倫理的に善にも悪にもなしうる手段・方法であること（14）．

14.1）従って，〔われわれ自身にとってだけでなく〕隣人たちにとっても有用な財産は，打ち捨てられるべきものではない．なぜなら財産というものは，所有するに値する所有物であり，有力さを秘めた力であり，人間が用いるべく神から準備されたものだからである．この財とは実に，〔使い方に〕通じた者の手で善き使い方をされるべく準備され備えられた，言わば素材であり道具なのである．2）道具というものは，もし術知を伴って用いられるならば，その術知を活かすものとなる．だがもし術知が不足すれば，道具それ自体には何ら責がないにもかかわらず，その道具はあなたの不器用さに災いされることになる．3）富もまたそのような道具なのである．あなたはそれを正しく用いることができる．するとその道具は，正義のために役立ってくれるであろう．だが不正に用いる者もあるだろう．その際，その道具は不正に仕えるものとなる．というのも道具とは，本性的に仕えるものであって，治めるものではないからである．4）であるから，それ自身のうちに善も悪も含まれておらず，何ら責

のないものに関して，その責が問われるべきではない．むしろそういった道具を善くも悪しくも用いることができる者に関して，その責が問われるべきなのである．なぜならそこに選択が行われるわけであり，まさにその選択が責を負うことなのだから．それは人間の知性に他ならない．なぜなら知性とは，自らのうちに自由な判断と，与えられたものを自由に扱いうる能力とを有しているものなのだから．5）それ故，財産よりもむしろ，霊魂の情動を棄て去るべきである．なぜなら情動は，現に持てるもののより善い用い方を受容しないからである．この放棄は，人が美しく善き者となって，上述のような財を相応しく用いることができるようになるためである．6）こういうわけで「すべての持ち物を断念し」（ﾙｶ 14,33），「あらゆる財産を売り払え」（ﾏﾙｺ 10,21）という掟は，霊魂の情動について語られたこととして理解されるべきである．

お）富の倫理的な性質は，霊魂の状態に依存すること：主の戒めは情動の根絶を意味すること（15）．

15.1）ここでわたしとしては，次のことをも付け加えたい．財には，霊魂の内にあるものと，霊魂の外にあるものとがある．そして霊魂の外にある財に関しては，もしそれらを霊魂が善く用いるならば，その財もまた善く思えることであろう．だがもし悪しく用いるならば，その財もまた悪く思えることであろう．われわれの持ち物を放棄するように命じている主は，次の二つのうち，どちらを捨て去ることを要求しているのだろうか．すなわち，その財が取り去られてもなお情動が残るようなものをだろうか．それとも，その財が取り除かれることによって，霊魂の外にある財も有益なものとなるものをだろうか．2）ところで，地上的な富の余剰を捨て去った者は，財という質料が残っていなくとも，情動においてなお富んでいるという状況になり得る．というのも彼の心境は，それ本来の活動を継続し，理性を窒息させ圧搾し，潜在する欲望でもって燃やし尽くす．かくして，情動においてなお富める彼にとっては，財産を失って貧しくなったことが，何ら有益なこととはなっていない．3）というのも彼は打ち捨てるべきものを打ち捨てず，善悪無記なるもの（adiaphora）を打ち棄てたからである．彼はおのが身から，仕えてくれる物を奪い取り，外的な財の欠乏のために，悪の本性的な質料を焚きつけたのである．4）こういうわけで，持てるもののうち害ある財は捨て去らねばならないが，もしその人がその財の正しき使い途に通じており，有用になりうるものであれば，捨て去るべきではない．5）思慮，節制，敬虔さをもって扱われるならば，財は有益で

ある．有害なものは打ち捨てねばならないが，外的な財が害を及ぼすことはないのである．

か）ここまでの論拠の総括：以上のような仕方で自らの財を用いる人は「霊において貧しい」人であるということ（16）．

16.1）このように，主は外的な財を用いることを認めている．主が打ち捨てるようにと命じているのは，生活のために必要な財ではなく，その財を悪しく用いるものなのである．それは霊魂の柔弱さと情動に他ならない．こういった弱さに関する豊かさは，どんな場合であっても死をもたらすものとなる．だがそれに打ち勝てば，救いが得られることになる．だから人は，霊魂をこういった情動の豊かさから浄めねばならない．すなわち，貧しくありのままの状態に保たねばならないのである．こういった状態において，人は「さあ，わたしに従って来るがよい」（ﾏﾙｺ 10,21）と告げる救い主に耳を傾けるべきなのである．2）というのも，心において浄らかとなった者にとって，主は，主自身がすでに道となっているからである（ﾖﾊﾈ 14,6）．これに対して，不浄なる霊魂のうちに神の恵みは訪れない．不浄なる霊魂とは，欲望に満ち，数多くの地上的な情念に呻吟しているものである．3）ここで例を引くことにしよう．財産や金や銀，それに家屋を神からの賜物として有している者がいたとする．彼はその与え手である神に対し，それらの賜物を用いて人々の救いのために仕えようとする．また彼は，それらの財は自分自身よりも兄弟たちのために獲得されたものであるということを知っており，財を治める立場に身を置ける．このような人は，獲得した財の奴隷ではない．また霊魂においてそれらに固執することもない．それらのうちに自らの生命を限定したり閉じ込めたりすることもない．むしろ，何か美しく神的な業を完成しようと常に努力する．そして，時にそれらの財を奪い取られねばならなくなることがあるとしよう．その際にも彼は，それらが有り余ることと同様に，それらが奪い取られることをも平静な思慮でもって忍耐できる．こういった人こそ主から祝福される人であり，「霊において貧しき者」（ﾏﾀｲ 5,3）と呼ばれる人である．彼は天の国を受け継ぐ準備ができている人であって，〔永遠の〕生命を得ることのできない「富者」ではないのである．

き）富を自らの霊魂に負っている者は，天の国を望むことができないこと：善き宝物と悪しき宝物（17）．

17.1）これに対して，霊魂のうちに富を保持し，神の霊に代えて心のうちに金や地所を抱えている者があったとしよう．彼は絶えず際限なく財を所持しようとし，常により大いなる財を目指している．このような者は，眼差しが下を向いており，世の足かせに束縛されている者であって，ちりに他ならずちりに帰る運命にある（創世 3,19）．こういった者が，天の国をどのようにして望み，思い描くことができようか．このような，心をではなく地所や鉱山を所持している人間に関しては，やはり本人が選び採ったことどものうちに彼自身も見出されるのが必然であろう．なぜなら「人の心があるところ，そこにその人の宝もある」（ﾏﾀｲ 6,21）のだから．

2）ここで「宝」ということに話題を転じよう．主は宝物に二種類があることを知っていた．その一つは善きものである．なぜなら「善き人間は，心の善き宝庫から善きものを取り出す」からである．もう一方は悪しきものである．なぜなら「悪しき人間は，悪しき宝庫から悪を取り出す．なぜなら口が語ることは，心から溢れ出ることだからである」（ﾙｶ 6,45）．3）であるから宝とは，われわれの許におけると同じく，主の許においても，それを見出した時に思いがけず大きな益をもたらすようなもの（ﾏﾀｲ 13,44）に限られはしない．第二の宝もあり，それは益なく羨やまれるものでもなく，獲得しても喜ばしくなく，有害なものである．ちょうどそれと同じように，富にも二種類があり，一方は善き富であり，もう一方は悪しき富である．実際われわれは，富と宝物とが本性的に互いに分かたれたものではないということを知っている．4）善き富とは望ましく獲得されるべきものであろう．これに対して悪しき富とは，望ましくなく打ち棄てられるべきものである．同様に，祝福される貧しさとは霊的なものである．それ故マタイは「貧しき人々は幸いである」と語ったのに続いてそのあり方を示し，「霊において」と付け加えている（ﾏﾀｲ 5,3）．そしてさらに彼はこう述べている．「神の義に飢え渇く人々は幸いである」（ﾏﾀｲ 5,6）．であるから，この逆のあり方における貧しき人々は憐れむべき存在である．彼らは神に与かることがなく，人間的な財には一層与かることがなく，神の義を味わうこともないからである．

く）富裕と貧困に関する霊的な意味（18）．

18.1）それゆえ，天の国に入ることが困難だとされる「富者」の意味に関し

ては，弟子たちの理解に沿って解されねばならない．散漫にまたなおざりに，肉の思いをもって理解すべきではない．そのような方法で語られた言葉ではないからである．救いは外的な財に影響されるものではない．外的な財が多かろうと少なかろうと，小さかろうと大きかろうと問題ではない．また，評価が高かろうと低かろうと，名誉を伴おうと伴うまいと，問題にはならない．霊魂の徳，信仰，希望，愛，兄弟愛，知，柔和さ，謙遜，真理．これらのものに，救いの報奨は置かれるのである．2）人が生きるのは，肉体の美しさによってではない．また逆に，美が伴っていなくとも滅びるわけではない．むしろ与えられた肉体に関して，汚れなく神意に沿った用い方をする人は生きることであろう．逆に神の神殿を破壊する者は滅びるであろう（1コリント3,17）．3）また，醜悪でかつ放蕩に陥る場合もありうるし，美に従って貞潔を生き抜くこともありうる．生命を産み出すのは肉体の力や大きさではない．逆に四肢の無力さが滅びを招くわけでもない．それらを用いる霊魂が，各々の場合に関してその原因をもたらすのである．4）そこで御言葉はこう語る．「頬を打たれても耐えよ」（ルカ6,29）．これなら力溢れる者でも，健全であれば聞き従うことができ，逆に病気の者でも，思慮が統率されていなければ逸脱することがありうる．5）それと同様に，貧困で力のない者でも，時に欲望に酔った状態になりうる．一方，財産において富んでいる者が，慎み深く快楽において乏しさのうちにあり，信心深く賢明で，また浄らかで節慮に満ちていることがあろう．6）であるからいま，取り分けまた第一に生命を有すべきものが霊魂であり，霊魂に関しては，それを生かすものが徳であり，死に到らしめるものが悪であるとしよう．すると直ちに以下のことが極めて明瞭となる．すなわち霊魂は，内的な財〔すなわち情動〕において乏しいときに救われる．内的な財の豊かさは，人に滅びをもたらすからである．だから霊魂は，内的な財において富むときに死ぬ．人を疲弊させるのは内的な財だからである．7）以上のような理由により，これからわれわれは完徳の原因を，霊魂のあり方と状態の中にのみ限定して探究することにしたい．この状態とは，神への従順と浄らかさ，また掟に対する不従順，悪の蓄積に関わるものである．

け）徳における富者と肉における富者：主の言葉の新たにされた意味（19）．

19.1）真の意味で，また相応しく富める人とは，徳において豊かであり，またいかなる運と言えどもそれに対して敬虔にまた信厚く対処することのできる人のことである．これに対して偽りの富者とは，肉において豊かであり，生命

を外的な財へと転化してしまう者である．この外的な財とは，過ぎ去り滅びゆき，時間に支配され結局は誰の手にも属さないものである．2）また同様に，一方において真の意味での「貧しき人」がいるが，偽ってこの名を帯びているにせの「貧しき者」もいる．前者は霊において，つまり彼自身の情動に関して貧しく，もう一方は世に関して，つまり外的な財において貧しい．3）〔後者すなわち〕世〔に属する財〕に関して貧しく，情動において富める者に対して，霊において貧しく神において富んでいる者がこう言う（※ﾛﾋﾞﾝｿﾝの提唱読みに従う）．「あなたの霊魂のうちにある他者の財を放棄せよ．あなたが心において浄らかになり，神を見るためである」（ﾏﾀｲ 5,8）．これを，同義かつ他の言葉で表現すれば「天の国に入るため」ということである．4）ではどうすればこの財から離れることができるであろうか？―売ることによって．では何を？―〔情動という〕財に換えて金銭を得るためであろうか．富の上にさらに富を増し加え，動産を金銭に換えるためであろうか．5）とんでもない．むしろ，以前から霊魂のうちに潜んでいるものに換えて，他の，神性をもたらし永遠の生命をもたらすものを取り入れるためである．霊魂とは，あなたが救いたいと望んでいるものなのである．その富とは，神の掟に沿った心の状態である．〔この交換の〕代償として，あなたには永続する救いと永遠の不滅性という報奨と栄誉が得られるであろう．6）こうしてあなたは現在の財〔すなわち内的な情動〕を売り払うことになる．すなわち量多くして余分であり，あなたを天から閉め出すものを捨て去るのである．そしてそれら〔の情動〕に換え，あなたは救いをもたらしうる〔内的な〕財を受け取ることができる．先にあなたが有していた情動は，肉的な意味で貧しく，そういったものを必要としている者どもが手にすればよい．あなたはそれと引換えに霊的な富を得るがよい．そうすれば，あなたははやくも天における宝を手にすることであろう（ﾏﾙｺ 10,21）．

富める青年の反応と使徒たちの恐れ：『マルコ福音書』10,20 と 10,26 の解釈（20）．

20.1）裕福で律法を盲従していたかの人〔青年〕は，こういったことがらを正しく理解しなかった．また，同じ人間がどのようにすれば貧しくかつ富める者になれるのか，財産を有しながら有さず，世を用いつつ用いずにいる方法は何なのかを会得しなかった．そして悲しみつつ気を落として立ち去った．彼は生命の座を放棄したのである．その座とは，彼が一途に望んでいたものであったが，それに触れることも彼には不可能となった．この青年は，困難な務めを

自ら不可能な業としたのである．2）困難だと言うわけは，目に見える富に結びついた奢侈や華美な誘惑のために，霊魂が眩まされたり惑わされたりしないようにするのは難しいからである．しかし，そういった状況にあってもなお救いに与かることは不可能ではない．人が自らを，感覚で捉えうる富から，精神的で神の教える豊かさへと向け変えるならば．そして，善悪どちらにでも成しうる財を美しく適切に用い，永遠の生命に向けて出発することができる術を学ぶならば．3）それでも，弟子たち自身でさえ，初めは恐れと驚きに満たされた．一体何を耳にしたからであろうか．彼ら自身もまた，財産を多く所持していたためであろうか．否，彼らは小網や釣針，それに乗っていた小舟さえも，はるか昔に手放していた．しかも，これらは彼らにとって唯一の持ち物であった．4）ならば弟子たちは恐れつつ何と言ったであろうか．「ではだれが救われるのだろうか」．かれらは弟子として，美しくかつ比喩をもって語られた主の言葉を聞きとめた．そしてこの言葉の深遠さを覚ったのである．5）まず彼らは金銭的な貧しさをもって，救いに希望を置いている．しかし彼らは，自分たちがまだ完全に情動を捨て去ったわけではないということを自覚しているため（というのも彼らはまだ学びを始めたばかりであり，つい先頃救い主の許に招かれたばかりであるから），「大いに驚いた」（ﾏﾙｺ 10,26）．そして自分たちも，先の富裕な青年に劣らず絶望に陥った．かの青年，すなわち財に強く固執し，永遠の生命よりも自らの財を優位に置いた若者と同じようにである．6）弟子たちが恐れに満たされたのは，時宜に適ったことであった．なぜなら〔主の言葉によれば，外的な〕財を所持している人間と，情動を孕んだ人間とが同じように天から追放されるということになるのだから．弟子たち自身も，情動において富んでいたのである．実に救いは，情動を被らない清らかな霊魂が手にしうるものなのである．

真摯に生に励む者に，神は援助の手を差し伸べるということ：『マルコ福音書』10,27 の解釈（21.1－3）．

21.1）けれども〔弟子たちの驚きに対して〕，主は「人間には不可能なことも神には可能である」（ﾏﾙｺ 10,27）と答える．この言葉もまた，偉大なる知恵に満ちている．なぜなら人は，自力で鍛練し不受動心（apatheia）を得ようと努力しても何も為し得ないからである．むしろ自分が，何よりもこの目標に対する熱意を持ち，努力を怠らないということを明らかにしたときに，神からの力が加えられて目的を果たすのである．2）なぜなら神は，霊魂が願望を起こ

すときに，その上に息吹きを吹きかける．しかし人がその願望から遠ざかるならば，神から与えられる霊もまた遠退いてしまうのである．なぜなら気の進まぬ者どもを救うのは力をもってする者の使命であるが，自ら進んで行う者を救うのは恵みを与える者の業だからである．3）神の国は，眠りこけ怠惰でいるような者のものではなく「力をもってする者がその国を強奪している」（ﾏﾀｲ 11,12）．というのも，神から力ずくで生命を奪い取るような力のみが善きものだからである．そして神は，力をもって，否むしろ辛抱強く耐え忍ぶ者どもに対して譲歩する．なぜなら神は，そのようなことに関しては自らが譲歩することを喜ぶからである．

ペトロの言葉：『マルコ福音書』10,28 の解釈（21.4－7）

4）こういうわけで，以上のようなことを耳にした至福なるペトロ，取り分け選び抜かれた者，弟子たちの筆頭の者は，いち早くこの言葉を察してこう返答したのである．主は，彼一人と自らだけのために，税を納めたのであった（ﾏﾀｲ 17,27）．5）彼はどう言っているであろうか．「ご覧下さい．われわれはすべてを捨ててあなたにつき従って来ました」（ﾏﾙｺ 10,28）．もしここで「すべて」というのが，自分自身の財産のことを指して言っているのであれば，おそらく聖書に記されている四オボロスのことであって，それを捨てたことを大言壮語しているのであろう．そして無意識のうちに，天の国がそれだけの価値しかないと表明していることになろう．6）だが先ほど述べたように，もし観念の上での財産，そして霊魂の上での病を捨てて師の足跡につき従って来たことを言っているのであれば，彼はすでに，天にその名を記されている人々（ﾙｶ 10,20）に属する者となっているであろう．7）というのも救い主の後に従うということは，まさしく主の過ちのなさ，完徳を実行することであり，主を言わば鏡と見立てて自らを整え，自らの霊魂を律し，主と同じようにすべてのことをすべてを通じてかたち作ってゆくことなのであるから．

もう一つの，比喩的に解釈されるべきイエスの言葉（22－23）．

22.1）「さてイエスは答えた．まことにあなたがたに言っておく．自らの持ち物，両親，兄弟たち，財産を，わたしのためまた福音のために捨てる者は，その百倍を受け取ることであろう」（ﾏﾙｺ 10,29）．2）しかしこの言葉によって心騒がせることはない．また今の言葉よりも激烈な，他の箇所での言葉にも驚くことはない．「父，母，子供たち，それに加えて自らの霊魂をも憎む者でな

ければ，わたしの弟子となることはできない」（ﾙｶ 14,26）．3）なぜなら「敵をも愛せ」（ﾏﾀｲ 5,44；ﾙｶ 6,27；6,35）と勧める平和の神が，憎しみを教えたり親友との離別を命じたりするはずはないからである．4）むしろ敵を愛すべきであるならば，そこから類推を働かせて，生まれの最も近い者をも愛すべきであろう．逆に，もし血縁にある者を憎むべきだとすれば，敵はより一層排斥すべきであると，受肉した御言葉は教えていることになる．そうすると，御言葉は互いに齟齬を来たすことになろう．5）しかし御言葉は互いに相反することはなく，むしろその逆なのである．すなわち人は，同一の思慮と態度から同一の基準に則って，敵を退けることも父をキリストより尊ぶこともなく，父を憎み敵を愛することができる．6）というのも，主は一方の言葉で憎しみと悪業を根絶し，もう一方の言葉で，救いを妨げるような近親者への敬意を打ち砕いているからである．7）それ故もし，ある人にとって父，息子あるいは兄弟が神を恐れぬ者であり，信仰の妨げになり，天上的な生命への躓きになるのであれば，彼らに援助したり同意したりすることはすべきでない．肉の上での近しさを，むしろ霊的な敵意によって解き放つべきである．

23.1）例を引くことにしよう．訴訟事件があったと考えてみたまえ．父親があなたの傍に立って次のように言う．「お前を生み，育てたのはこのわたしだ．わたしについて来い．わたしとともに悪事に加担するのだ．キリストの掟に従ってはならない」．あなたの父親とはこれ以外にも冒涜の限りを尽くし，本性的に死者のような者であったとしよう．2）だが，もう一方の側からの救い主の言葉を聞くがよい．わたしはあなたを新たに生まれさせた（1ﾍﾟﾄﾛ 1,3）．不幸にも世のために，死すべき者として生まれていたあなたを．そのあなたをわたしは自由の身とし，癒し，贖った．わたしはあなたに，過ぎ去ることがなく永遠の，超地上的な生命を授けよう（ﾖﾊﾈ 10,28）．わたしはあなたに善き父である神の御顔を見せよう（ﾖﾊﾈ 14,8－9）．地上では，誰をもあなたの父とは呼ぶな（ﾏﾀｲ 23,9）．死者の葬りは死者にさせるがよい．あなたはわたしに従って来るがよい（ﾏﾀｲ 8,22）．3）わたしはあなたに休らいと，語ることも述べることもできない善なるものの享受へと導こう．それは「眼が見たことも耳が聞いたこともなく，人の心にのぼったこともないものである．また天使たちが垣間見ようと欲するもので，神が聖なる人々に善きものとして，また自らを愛する子供たちに見られるように準備したものである」（1ｺﾘﾝﾄ 2,9）．4）わたしはあなたの育て手として，私自身をパンとして与えよう．それを味わった者は誰一人として，決して死の試みを受けることがないものである（ﾖﾊﾈ 6,50－

51)．そしてわたしは日々不死なる飲み物を授けよう（ﾖﾊﾈ 4,14）．わたしは天上的な教えの師である．あなたのために死に対して闘いを挑み，あなたの死を贖った．死とはあなたがかつて犯した過ちと，神に対する不信の故に，贖いの代となっているものである．5）双方の側からなされる以上のような言葉を耳にして，あなたは自分自身に関して裁きを行うがよい．そしてあなた自身の救いのために票を投ずるがよい．たとえ兄弟や子や妻や，その他の誰かが〔かの父親と〕同じようなことを言ったとしても，すべてに先んじてキリストを勝利者とせよ．なぜならキリストはあなたのために苦闘しているからである．

永遠の生命への配慮が優先されるべきこと（24）．

24.1）あなたは財に対しても，その主たり得るであろうか．そうだと言いたまえ．なぜならキリストはあなたから財産を奪うことはしない．主は妬まないからである．けれどもあなた自身がその財に囚われ，打ち負かされるということがお分かりであろうか．放っておけ，投げ捨てよ．憎め，別れを告げよ，逃げよ．2）「もしあなたの右の目があなたに罪を犯させるのであれば，早急にその右目をくり抜いて捨てよ」（ﾏﾀｲ 5,29）．全身が健全で火に投げ込まれるよりも，片目であっても天の国に入れる方を選ぶべきだからである．手であれ，足や霊魂であれ，それを憎め．なぜなら，この世でキリストのためにそれらを失うのであれば，かの世で救われるだろうからである．

「迫害を受けつつ有する」という言葉の意味について：『マルコ福音書』10,30 の解釈（25）．

25.1）同様に，以下に続く「今この世で迫害を受けながら，畑，財産，家，兄弟を有したところで何になろうか」（ﾏﾙｺ 10,30）という一節も同様の意味を有している．2）なぜならキリストは，財を持たない者，家を有しない者，兄弟のない者をではなく，富める人々を生命に招いたのであるから．そして既に述べたように，例えばペトロとアンドレアス，ゼベダイの子ヤコブとヨハネといった兄弟たちをも主は招いたのである．とは言え彼らは兄弟の間ばかりではなく，キリストとも思いを一つにしていた．3）これに対し「迫害を受けつつ」という句によって，主は上で述べたようなものの所有を禁じている．もっとも「迫害」のうち，あるものは外界から生ずる．すなわち人々が敵意や妬み，金銭欲や悪魔の力によって，信厚き者どもを追い立てる場合である．4）だが，最も過酷な迫害とは内的なものである．その迫害は，各人に対して霊魂そのも

のから出てくる．それは霊魂が不信な欲情や雑多な快楽，悪しき期待，有害な幻影によって害なわれる際に，また霊魂がより大なるものを望み，野卑な享楽によって狂乱へと燃え，そのうちに棲む激情によって，あたかもとげか拍車に刺激されたかのように，狂った興奮，生命への絶望，神への蔑視に向けて駆り立てられる場合に生ずるのである．5）これこそ，より重くより困難な迫害であり，人間の内側から駆り立て，常にまとわりついてくるものであって，この迫害を受けた者がそこから逃れることは不可能である．というのも彼は，どこに行こうと自分のうちに敵を連れて歩き廻ることになるからである．6）ちょうどそれと同じように，燃える炎も外側から襲いかかっては試練を加え，内側からは死をもたらす．そして外側からもたらされる闘いは容易に終わらせることができるが，霊魂の内部でおこる闘いは死にいたるまで及んでいるのである．7）あなたがもしそのような迫害を伴う感覚的な富を有しているならば，それが血縁にある兄弟やその他の質であろうと，それら悪に通ずる所有権は放棄せよ．そして平和をあなた自身にもたらせ．さらに永続する迫害から逃れよ．それらを避けて福音へと向かえ．あらゆるものに先んじて救い主を，つまりあなたの霊魂の擁護者・弁護人である限りない生命の統括者を選び取れ．8）なぜなら「目に見えるものは束の間のものであるが，目に見えないものは永遠なるものだからである」（2 ｺﾘﾝﾄ 4,18）．そしてこの世でははかなく定かでないものも「来たる世においては永遠の生命だからである」（ﾏﾙｺ 10,30）．

公正な所得と所有には落ち度がないこと：『マルコ福音書』10,31 の解釈（26.1－6）．

26.1）「先にいる多くの者が後になり，後にいる多くの者が先になるであろう」（ﾏﾙｺ 10,31）．この一節はその深い意味，解釈において多様であろう．しかし今ここで，その意味を明確にすることが求められはしない．というのも，主が語り掛けているのは財産多き人々ばかりでなく，総じて信仰によって自らを完全に献げ尽くすすべての人々だからである．それゆえここでは，以上のような細かい議論は差し控えることにしたい．2）けれどもわれわれが立てた問いに関しては，約束に完全に沿うかたちで，次のことが明らかにされたと思われる．すなわち救い主は富める人々に対して，富そのものあるいは財という覆いにことかけて彼らを閉め出したり，救いから除外したりはしないということである．もし本当に彼らが神の掟に腰をかがめることができ，またそう望むのであれば，そして自らの生命を束の間のことどもよりも重んじ，主に対して確

固たる眼差しを注ぐのであれば．ちょうど優れた舵取りに対し，彼が何を欲し，何を命じ，また何を意味し，どんな合図を自分たちに与え，何処にまた何処から錨を降ろすべきかを知らせるのだろうと，その指図を注視する船員のように．3）思慮を働かせ，信仰に先んじて十分な生活を確保することを惜しむような人に，どんな罪があり得るだろうか．あるいはそれよりもさらに咎がないのは，運命を分け与えた神によって，今述べたような人々の家に，また金に恵まれ富において力ある生まれに導き入れられた人々の場合であろう．4）というのも，もし富のうちなる本意でない誕生によって生命から追い払われるのであれば，束の間の快楽へと断罪される一方，永遠の生命を奪い取られるのであるから，父なる神によってむしろ不正を犯されるわけである．5）それならば一体富というものが地上に誕生する必要があったのであろうか．もし富が死の与え手でありまた死の友であるのならば．6）だが，もし誰かが富の力を，現にある財以下に抑え，節度をもって考え思慮を働かせて，神のみを求め神の息吹を吸い，神とともに生を送るならば，彼は貧しき者として掟に副うこととなり，自由であり，負けることがなく，病を知らず，富によって傷つけられることがないこととなろう．

ラクダと針の穴（26.7－8）．

7）だがもしそうでなければ，そのような富者が神の国に入るよりも，ラクダが針の穴を通る方が早い（ﾏﾙｺ 10,25）．8）であるからこの箇所では，ラクダが狭き隘路を富者に先んじて通るというようなこと（ﾏﾀｲ 7,14）よりも，もっと崇高なことが意味されていると考えるべきである．これは〔拙著〕『諸原理と神学に関する解説』（※現存せず）において，救い主の神秘として学びうることであろう．

第２部．救いへの道（27 － 38）．

主題への移行：富の正しい利用について（27.1－2）．

27.1）しかしそれはともかくとして，まず明白なことがらを，そしてこの譬えが語られた意味に関して説明しよう．富める人々は次のことを教わるがよい．すなわちなぜすでに咎に定められた者のように自らの救いをなおざりにしてはならないのか，あるいは逆に富を海に投げ捨ててはならないのか，また富を生命に対して企みをなす敵なるものとして軽蔑してはならないのか，さらにむし

ろ，どのような方法でまたいかにして，富を用いるべきか，そして生命を獲得すべきかを学ぶべきなのである．2）というのも恐れつつ富んだからといって，誰も決して滅びることはないし，救われるということを，勇気をもって信じても，必ずしも救われるというわけではないからである．だからさあ，調べてみよう．いったいいかなる希望を救い主が彼らに対して描き出しているか，そしてどのように，希望のないことが信じうることとなり，希望していたことが獲得できるものとなるかを．

「神への愛」および「隣人への愛」に関する掟について（27.3－28）．

3）師〔イエス〕は「掟の中で最大のものは何ですか」と尋ねられて，こう答える．「あなたの神である主をあなたの霊魂すべてをもって，あなたの力の限りを尽くして愛すがよい」（ﾏﾙｺ 12,30－31）．どんな掟も，これよりも大きくはない．そしてそれはもっともである．4）というのも，これは第一にして最大の方に関して告げ知らせるものだからである．すなわちこの掟は，われわれの父なる神ご自身に関してであり，その方を通してすべては成り，存在し，救われたものはその方に向けて再び帰ってゆくのであるから（ﾛｰﾏ 11,36）．5）そしてわれわれは，この方によってまず愛され（1 ﾖﾊﾈ 4,19），生まれることができたのであるから．それ故何か他のものをより長じたもの，より貴重なものと見なすのは敬虔な態度ではない．むしろわれわれは主に対して，かの測り知れぬほど大きな慈しみに僅かばかりの謝意を表しうるのみである．われわれは，欠けたるところのない全き神に対しては，謝意以外の返礼を考え出すことができない．それゆえ父を愛することによって，自らに固有の力と能力の上に，不死性をもかち取らねばならない．なぜなら人は，神を愛すれば愛するだけ，それだけ一層神の内面へと入って行くことができるからである．

28.1）さて順序において第二であり，第一のものに何ら劣るものでないこととは「あなたの隣人をあなた自身のように」すなわち神をあなた自身よりも「愛しなさい」ということであると主は言っている（ﾙｶ 10,27）．2）しかしこれに答えて人は「隣人とは誰か」と聞き返した（ﾙｶ 10,29）．主は，ユダヤ人たちと同様の仕方では，〔隣人を〕血縁のものとも，市民とも，改宗者とも，〔自分たちと〕同様に割礼を受けている者とも，同一の律法に従う者とも規定しない．3）むしろ主は，都エルサレムからエリコへと下っていったある人の話を持ち出した（ﾙｶ 10,30－37）．この人は盗賊どもによってめった打ちにされ，道端に半殺しのまま打ち捨てられ，祭司には見殺しにされ，レビ人には見放さ

れたが，ふだん彼が非難を投げつけ打ち棄てているサマリア人からは憐れみを示された（ﾙｶ10,31）．彼は先に述べたような人々のように素知らぬ顔で通り過ぎるようなことはせず，危険に逢った人が必要とする類のものを装備してやって来ていた．すなわちぶどう酒，オリーブ油，包帯，ラバ，宿屋の主人に与えるべき賃金などである．彼はこの賃金の一部は即座に与え，一部はさらに後で与える約束をした．4）キリストは問う．「このような恐ろしい目に逢った人にとって，今挙げた人々の中で誰が隣人となったであろうか」と．相手はこう答えた．「その人に対して憐れみを示した人です」．〔主は言った〕，「ではあなたも行って同じようにするがよい」，愛が善行を産んだのだから，と．

われわれの隣人とはキリストであること（29）．

29.1）したがって，この二つの命令において主は愛を説いているのである．けれども順序において，主はその愛に区別を設けている．すなわち主は，神への愛を第一位に置き，隣人への愛を第二位に置いているのである．2）ところでこのような隣人としては，かの救い主その方以外に誰かありうるだろうか．あるいはこの救い主以上に，誰かわれわれを憐れんでくれる人があるだろうか．闇の世界の支配者（ｴﾌｪｿ6,12）の故に，幾多の傷や恐れ，情動，怒り，苦難，欺瞞，快楽によって，ほとんど死に陥っているわれわれに憐れみを懸けてくれる方が．3）このような傷の癒し手は，ただイエス一人である．彼は情動を完全に根絶した．しかしそれも，律法が，不毛な作物や悪しき木々の実りを産み出したような仕方でではなく，自らの斧を悪の根元に据えるという方法によったのである（ﾏﾀｲ3,10）．4）この方は，ぶどう酒すなわちダビデの樹の血を（『十二使徒の遺訓』9.1－2），われわれの傷ついた霊魂に注ぎかけた．またこの主はオリーブ油，すなわち父の腹わたから溢れ出る憐れみを，さらに増し加えてふんだんに与える．そして彼は，健康と救いの解きがたき絆を示す．すなわちそれは愛，信仰，希望である（1ｺﾘﾝﾄ13,13）．またこの方は諸々の天使，権威，権能に対し，大いなる報いをもってわれわれに仕えるように命ずる（ﾍﾌﾞﾗｲ1,14）．なぜなら彼ら自身もまた，神の子たちの栄光が顕現するとき，世の虚しさから解き放たれるだろうからである（ﾛｰﾏ8,19－21）．5）そういうわけでわれわれも，この方を神に対すると等しく愛さねばならない．そしてキリスト・イエスを愛する人とは，この方の望むところを行ない，この方の掟を守る人である（ﾖﾊﾈ14,15）．6）「なぜならわたしに対して〈主よ，主よ〉と言う人がみな天の国に入るわけではなく，わたしの父の望みを行う人が入るの

である」から（ﾏﾀｲ7,21）．また「なぜあなたがたは私を〈主よ，主よ〉と言いながら，わたしの言うことを実行しないのか」（ﾙｶ6,46）．あるいは，あなたがたがわたしの言うことを行うならば「義人や預言者たちが聞いたことも見たこともないようなことを見聞きすることになり，幸いである」（ﾏﾀｲ13,16以下）．

キリストへの愛とは，キリストを信ずる人々への愛をも意味すること（30）．

30.1）こういうわけで，キリストを愛する人が第一の人であり，第二はキリストを信ずる人々を尊敬し，敬意をもって遇する人である．というのも，もしある人が弟子に対してそのようなことを行ったならば，それは主が自らに対して為されたものとして受け容れ，そのすべてを自らにことかけるからである．2）「〈さあ，わたしの父に祝福された人々よ，世のはじめ以来，あなたがたのために準備されていた国を受け継ぐがよい．おまえたちは，わたしが飢えていたときに食べさせ，のどが渇いていたときに飲ませ，旅をしていたときに宿を貸し，裸のときに着せ，病気のときに見舞い，牢にいたときに訪ねてくれたからだ〉．3）すると，正しい人々が王に答える．〈主よ，いつわたしたちは，飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ，のどに渇きをおぼえておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか．いつ，旅をしておられるのを見て宿を貸し，裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか．いつ，病気をなさったり，牢におられたりするのを見てお訪ねしたでしょうか〉．4）そこで，王は答える．〈はっきり言っておく．わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは，わたしにしてくれたことなのである〉」（ﾏﾀｲ25,34－40）．5）一方王は逆に，こういったものを弟子たちに与えなかった者どもを，自らに対して与えてくれなかったからという理由で，永遠の火の中に投げ入れる．6）また，別の箇所ではこう語られている．「あなたがたを受け容れる者はわたしを受け入れ，あなたがたを受けいれない者はわたしを拒むのである」（ﾏﾀｲ10,40）と．

貧しき人々は，イエスの特別な愛のうちにあるということ（31.1－6）．

31.1）主は信ずる人々を「子供たち」「幼子たち」「幼児たち」「友だち」，また彼らの来たるべき天上での偉大さに鑑みて「この世における小さき者ども」（ﾏﾀｲ10,42）と名づけている．なぜなら主は「これらの小さな者を，一人でも軽んじることのないようにせよ．言っておくが，彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである」（ﾏﾀｲ18,10）と言っているの

であるから．2）また別の箇所では「恐れるな，小さき群れよ．あなたがたに父は，天の国を与えてくださるという好意を示して下さったからである」（ﾙｶ 12,32 以下）．3）同様にして，女性から生まれた者のうちで最大である洗礼者ヨハネよりも，天の国における最も小さき者，すなわち自らの弟子の方が大きいと主は言う（ﾏﾀｲ 11,11）．4）また別の箇所で主は，「義しき者や預言者を，義しき者あるいは預言者の名において受け容れる者は，彼らの報いを受け取るであろう．また弟子に対し，弟子の名において水を飲ませる者は，冷たい水一杯だけの報いを失うことはないであろう」（ﾏﾀｲ 10,41－42）と語っている．すなわちこれだけが，報いとして失われることのないものなのである．5）あるいはさらに，「あなた自身のために，不正のマモンから友人を作るがよい．あなたが見捨てられたとき，彼らが永遠の幕屋に受け入れてくれるであろう」（ﾙｶ 16,9）と告げられる．6）ここで主は，次のようなことを明確にしているのである．つまり財というものはすべて本性的に，もし人が事欠いている人々のために共用に供せず，自分自身のものとして自らのために獲得するならば不正なものである．しかしそのような不正からでさえ，義しきものや救いを獲得することができる．そして，父の許に永遠の幕屋を獲得した人々を休らわせることができる，と．

命ぜられなくとも富は差し出されるべきこと（31.7－9）．

7）まず第一に，次のことに留意したまえ．すなわち主があなたに対して，要求されたり煩わされたりするまでじっとしてしるように命じているわけではないということである．むしろあなた自身の方から，援助を必要とする人は誰か，また救い主の弟子として相応しい人は誰かを探せ．8）実に，使徒も次のように美しく語っている．「神は喜んで与える者を愛する」（2 ｺﾘﾝﾄ 9,7）．すなわち与えることにおいて喜び，惜しむことなく蒔く人を神は愛するのである．これは刈り取りがわずかとなるようなことのないためである（2 ｺﾘﾝﾄ 9,6）．また呟きや分け隔て，嘆きなしに分かち合う人を神は愛する．これは浄らかな善行だからである．9）さらにこれよりももっと素晴らしいのは，主が他の箇所で語った次の言葉である．「あなたに求めるすべての人に与えよ」（ﾙｶ 6,30）．なぜならそのような寛大さは，真に神のなせる業だからである．けれどもさらに「神的」という表現さえ物足りないのは「求められるのを待つことなく，誰であれ援助を必要とする人を進んで探せ．そうすれば，そのような分かち合いに対する極めて大きな報い，すなわち永遠の住まいを獲得しうる」（ﾙｶ 16,9）

という言葉であろう．

慈善の報いは永遠の生命であること（32）．

32.1）何と美しき取引であることか．何と神的な商いであることか．あなたは不死性を金銭で買える．そして世の滅び行くものどもと引換えに，天にある永遠の住まいを手に入れることができる．もし思慮ある身であれば，この住まいに向けて航行せよ．2）富める者よ，もしあなたにとって必要であれば，あらゆる土地を経めぐるがよい．危難や労苦を惜しむことなく，この世において天の国を買い入れるためである．3）何故にあなたは，輝く石や宝石，家屋をそれほどまでに喜ぶのか．くすぶる火の薪，一時の慰み，地震を引き起こすもの，僭主の傲岸に過ぎぬものを．4）天に住み，神とともに王として統治することを望むがよい．神に倣う人が，その支配権をあなたに与えることであろう．世ではわずかしか受け取らなかった彼が，天の国では永劫にあなたを共棲者とすることであろう．5）天の国に受け入れてもらえるように嘆願せよ．戦え．主があなたを尊ばないのではないかと恐れるがよい．なぜなら主は，あなたが受け取るようにではなく，あなた自らが提供するように命じるからである．6）主は「与えよ」「提供せよ」あるいは「善行を積め」「援助せよ」などとは決して言わず，ただ「友をつくれ」と言った（ﾙｶ 16,9）．けれども友人とは，たった一つの贈り物からは決して生じない．むしろ完全な安らぎ，永き交わりから生ずるのである．というのも信仰や愛，堅忍は，わずか一日でなしうることではない．逆に「最後まで耐え抜く者は救われる」（ﾏﾀｲ 10,21）からである．

神の友としての貧しき人々：人を問わぬ慈善（33－34）．

33.1）では人は，いかなる仕方でものを与えることができるであろうか．主は，相手に対するあなたの敬意，善意，そして親しさを通して与える．「というのもわたしは友人たちばかりにではなく，友の友人たちにも与えるからである」（典拠不詳）．2）ここでの「神の友」とは誰のことであろうか．あなたは，誰が〔それに〕相応しい人か，誰がそうでない人かということを判断すべきではない．なぜならあなたはその判断に関して間違いを犯すことがありうるからである．それ故，無知のために不安な場合には，相応しき人物のことを考えて相応しからざる人物をも善くもてなす方が，善ならざる人物を警戒するあまり真摯な人物にも出会わないという事態よりもましなのである．3）という

のも余りに警戒しすぎることによって，出会った人が相応しき人か，あるいは逆にそうではないかをあなたが判断するうちに，神を愛する人をもなおざりにしてしまうということが起こりうるからである．そのことに対する罰は，永遠の火による懲らしめである．一方，しきりに請い願う人々をすべて受け入れることによって，必ずや神の前で救いを得ることのできる人を見出すことができよう．4）であるから「裁くな．あなたが裁かれないためである．あなたが測る尺度で，あなたもまた測られるであろうから」（ﾏﾀｲ 7,1）．「押し入れ，揺すり入れ，あふれるほどに量りをよくしてあなたに報いが与えられるであろう」（ﾙｶ 6,38）．5）神の弟子として記録されたすべての人々に懐を開け．肉体的な観点から，人に軽蔑の眼差しを注がぬように．また年齢の若さ故に人を軽んじたりしないように．また誰かある人が財産を持たず，身なりが貧しく，なりが貧相で病弱に思えたとしても，そういったことには心を向けるな．逆に，そういったことから目を背けることもするな．6）そのような外面的なことがらは，われわれが世に関わりを持ってゆくために，外側からわれわれにまとわれるものである．そしてそれはこの世という共通の学校にわれわれが入ることができるためのものなのである．けれども父は，そしてわれわれのために死に，われわれとともに復活した子は，心の内側に隠れて住まう．

34.1）この外面上の姿は死と悪魔を欺く．というのも内的な富と美は，死や悪魔には見えないからである．死や悪魔は，弱点として軽蔑する肉的なものを目がけて襲いかかり，内的な財には盲目である．そして，われわれがどれほど大きな父なる神の力と子なる神の血と，聖霊の滴りとによって武装された「土の器に入った宝庫」を携えているかを知らない．2）けれどもあなた自身は決して欺かれてはならない．真理を享受し，偉大なる贖いに値する者とされたのだから．むしろ他の人々とは逆に，あなた自身のために，武装せず戦うことも血を流すこともしない，怒りも汚れもない軍団を配せ．その軍団とは敬虔な老人たち，神に愛される孤児たち，柔和さをまとった寡婦たち，愛に飾られた人々である．3）そのような人々を，あなたの富でもって，あなたの体と霊魂のための護衛として獲得せよ．彼らの統率者は神である．彼らのために船が来る．その船とは沈みかけていたものが，聖なる者たちの祈りのみによって軽々と操縦されてきたものである．また猛威を振るっていた病が，彼らの挙手によって打ち砕かれる．さらに盗人たちも，敬虔な祈りによって武具を剥ぎ取られ，その攻撃はなきものとなる．そしてついには，悪魔の力が厳然たる命令の許に打破されるのである．

富者の真なる助け手としての貧しき人々（35）.

35.1）これらすべての兵士たちのうちには力があり，守り手たちは堅固である．一人として怠惰な者はなく，有用でない者はいない．ある者はあなたのために神に願い求めることができ，ある者は疲れたときのあなたを慰めるであろう．またある者は，あなたのために万物の主に対して同情をもって泣きまた嘆いてくれるであろう．またある者は救いにとって有益なことを教えてくれるであろう．またある者は雄弁をもって勧告しうるであろう．またある者は好意をもって忠告するであろう．〔こうして〕すべての人が真実をもって，偽りなく，恐れなく，偽証せずにまた懲らしめられることなく，自然な形で愛することができるであろう．2）友が役立ってくれるとは，何と甘美なことか．勇気を振るう者どもの仕えとは，何と幸いなることか.神のみを恐れる者どもの信仰は，何と純粋なものであろうか．偽ることの出来ぬ人々の言葉は，何と真実であることか．神に仕え，神に従い，神を喜ばすことを決意した人々の業は何と麗しいことか．彼らはあなたの肉体を捉えることではなく，皆あなた自身の霊魂に触れることを重んずる．また兄弟と語ることではなく，あなたの内に住む永遠の王（1 ﾃﾓﾃ 1,17）と語ることを重視するのである．

選択の最高の段階（36）.

36.1）であるから信厚き人々はすべて美しく，神にも似て，言わば宝石のように冠せられる呼び名にも相応しい者どもである．実際彼らは，すでに選び抜かれた人々にまさって選び抜かれ，それだけ一層より無名となり，ある意味で世の波から自らを引き上げ，安全な場所に退避する．これは，たとえ誰かそう言う人があろうとも，自らが聖なる者と思われることを望んでのことではなく，むしろそれを恥じ，語り尽くせぬ神秘を思慮の深みのうちに隠し，自らの高貴さが世に公になることを軽んじるからである．彼らを御言葉は「世の光」また「地の塩」と呼んでいる（ﾏﾀｲ 5,13－14）．2）すなわちこれは神の種，似像，似姿であり，神の嫡子で相続人である．言わば異国の地に住むために，父の偉大なる摂理と配慮によってこの世に送り込まれた者であると言えよう．3）それ故に，世の明白なるものも目に見えないものも，この世に送り込まれた者たちに仕え，鍛練し，教育するために造られたのである．そしてすべては，この世にその種（＝崇高な霊魂）が留まる限り維持される．そしてその種が集められるや否や，万物は速やかに明らかとなるであろう．

救いのための最上の道としての愛（37－38）.

37.1）ではさらに何が必要であろうか．愛の神秘を見よ．するとそのときあなたは，父の懐を垣間見ることであろう．それは独り子なる神だけが語って見せたものである（ﾖﾊﾈ 1,18）．その同じ神はまた愛であり（1 ﾖﾊﾈ 4,8），愛を通じてわれわれに観照されるのである（1 ﾖﾊﾈ 4,16）．2）そして父とは神の語り明かせない部分であり，われわれと情動を共にした部分が母である（cf.ｼｭﾈｼｳｽ『讃歌』2.63－64）．父は愛することによって弱き者となり，そのことの偉大なる証しが，彼自身が自ら産んだ者である．そして愛から生まれた実りも愛である．3）彼自らが身をへりくだらせ，人間性を身に帯び，人間の痛みを進んで受けたのも，すべてこのためである．それは，愛の対象であるわれわれの弱さに倣って測られた神が，われわれを自らの力へと計り改めるためであった．4）主は契約を結ぶために自らを贖いの代として提供し，われわれに新しい契約を残したのである．「わたしの愛をあなたがたに与える」（ﾖﾊﾈ 14,27）．この愛とは何でありどの位の大きさのものであろうか．神はわれわれ一人一人に対して，万物に値する〔生命ある〕霊魂を備えた．この愛を神は，われわれからわれわれ皆のために求め返す．5）もしわれわれが兄弟たちのおかげでこのような霊魂を有し，救い主に対しても同様の契約に合意するのであれば，世にあるわずかばかりの，われわれとは無縁な過ぎ去りゆくものを，節約し蓄えておいてよいだろうか．われわれは，ほどなく火が焼き尽くすようなものを，互いに蓄えておいてよいであろうか．6）かのヨハネは神的にまた聖霊に満ちてこう言っている．「兄弟を愛さない者は，殺人者である」（1 ﾖﾊﾈ 3,15）．すなわちそれはカインの裔，悪魔の末裔であり，神のはらわたを持たぬ者，より大いなることへの希望を持たぬ者，蒔かれぬ種，不毛の種であって，永遠の生命を持つ天上的なブドウの枝（ﾖﾊﾈ 15,5）ではない．彼は切り倒され，彼を待ち受けるのは激しい火である．

38.1）あなたは「最高の道」（1 ｺﾘﾝﾄ 12,31）を学びたまえ．これはパウロが救いのために教えているものである．「愛は自らのものを求めず」（1 ｺﾘﾝﾄ 13,5），兄弟のために注がれる．兄弟の周囲を翔き，兄弟のために節制をもって燃えさかる．2）「愛は多くの過ちを隠す．完全なる愛は恐れを追い払う．愛は苛立たず，恨みを抱かない．不義を喜ばず，真実を喜ぶ．すべてを忍び，すべてを信じ，すべてを望み，すべてに耐える．愛は決して滅びない．預言は廃れ，異言は止み，癒しは地に残されよう．しかし信仰，希望，愛，この三つは永遠に留まるであろう．その中でも最も大いなるものは愛である」（1 ｺﾘﾝ

ト13,4；6；8－13）．3）これは正しい．何故ならまず信仰は，われわれが神を見る顕神に到ったときには過ぎ去る．また希望は，望んでいたものが与えられたとき，消え去る．しかし愛は充溢にいたり，完全なるものが与えられてもなお，更に増大し続ける．4）もし誰かが愛を霊魂のうちに吹き込んだならば，たとえ過ちのうちに生まれた者であっても，また禁ぜられた幾多の行為をなした者であっても，愛を成長させて浄らかな回心をなし，躓きに抗して闘いを新たに始めることができる．5）さて以下に述べることも，あなたに絶望や落胆をもたらすものとはならないように願いたい．すなわちここでは，天にいかなる場も持たない富者とは誰か，あるいはいかにして人は自らの財を用いるべきかに関してあなたに理解して頂きたいのである．

補説．回心と悔い改め（39－42）．

罪に陥った富者たちにとっての，救いの道としての回心（39）．

39.1）もちろんその方法は，人が富によってもたらされる中傷や苦難を乗り越えて生命へと到り，永遠の善を享受するためのものである．例を引くことにしよう．ある富者が，洗礼という封印ののち，無知か弱さかあるいは不本意な状況によって，何らかの過ちや罪に陥り，そこに完全に囚われてしまったとしよう．けれどもあなたは，この人間が神からまったく断罪されてしまったなどとは考えないで頂きたい．2）というのも，真実をもって，心のすべてにおいて神に立ち返る者にはすべて扉が開かれ，父は真に回心を遂げた子を大喜びで迎え入れるからである．もっとも真なる回心とは，もはや同一の罪に服すことのないものであり，自らに対してその過ちゆえに死の宣告をしていたことを，霊魂からまったく根こそぎにしてしまうことである．なぜなら，そういった罪の意識が取り除かれてはじめて，もう一度あなたの許へと神が住まいを定めるであろうから．3）一人の罪人が立ち帰り回心を遂げたとき，天における父と天使たちの喜びと祝祭は，大きくまた譬えようのないものだと言われている．4）主はこう叫んでいる．「わたしが望むのは憐れみであっていけにえではない．わたしは罪人の死を望まず，回心を欲する」（ｴｾﾞｷｴﾙ 18,23）．「たとえあなたがたの罪が，深紅の羊毛のようであっても，わたしは雪のように白くしてみせよう．たとえ闇よりも黒かろうとも，洗い流して輝く羊毛のようにしてみせよう」（ｲｻﾞﾔ 1,18）．5）罪の赦しを授け，過ちを数えない（ﾏﾙｺ 2,7）ということは，ただ神のみになしうることなのである．それ故に主はわれわれにも

日々，兄弟たちが回心するなら赦すようにと命じている（ﾙｶ 17,3－4）．6）しかるにもし，悪しきわれわれでさえ善き贈り物を与える術を知っているのであれば（ﾏﾀｲ 7,11），ましてや「憐れみの父」（2 ｺﾘﾝﾄ 1,3）にして「あらゆる慰め」（ﾔｺﾌﾞ 5,11）の善き父，情け深く憐れみに満ちた方ならば，どれほど寛容であることだろうか．父は回心を遂げる者を待っている．けれどもこの回心とは，過ちを断ち切ること，そして二度と後ろを振り向かないことなのである（ﾙｶ 9,62）．

回心とは生活の完全なる変更を意味すること（40）．

40.1）過ぎ去ったことに関しては神が赦しを与えるけれども，将来のことに関しては，各自が自らを赦す責を有している．そして回心とは，過去の行為を謝罪し，そのことへの赦しを父に求めることなのである．すべての者のうちで父のみが，すでに行われてしまったことを，自らの憐れみによって為されざることとし，以前の過ちを霊の滴りによって拭い去ることのできる方なのである．2）「何故ならわたしは，あなたがたを見出すところ，それに従ってあなたがたを判断するからである」（ｴｾﾞｷｴﾙ 33,20）．3）そしてその各々に関して，彼は万物の終わりが近づいていると叫ぶ（1 ﾍﾟﾄﾛ 4,7）．かくして人生において最大なることを善く為した者も，その最後において悪へと墜落すると，かつての労苦はすべて無駄となり，芝居の終幕において無用の長物となってしまう．一方かつては悪しき生きざまを晒し，無思慮に生きてきた者も，最後に回心するならば，幾多の時間の悪しき生きざまに対しても，回心の後の時間によって完全な勝利をおさめることができる．4）しかしそれには細心の心がけが必要である．ちょうど，長患いに疲弊した肉体には，食餌療法により一層の熱心さが必要なのと同様である．5）盗人よ，赦しを受けたいと思うか．もう二度と盗むな．姦通者よ，二度と情欲の火に燃えるな．姦淫を犯した者よ，これからは浄らかな生を送るがよい．強奪した者よ，返せ，倍にして返すがよい．偽証した者よ，真理に励むがよい．偽って誓った者よ，二度と誓うな．そしてその他の情動を絶つがよい．怒り，情欲，苦悩，恐怖．それはあなたが，帰路において敵対者といち早く和解する者とならんがためである．6）とはいうものの，おそらく習慣的となった情動を即座に断ち切るのは不可能であろう．しかし神の力と人間の嘆願，それに兄弟の助力，そして清らかな回心，たゆまぬ実践をもってすれば，生は必ず直されるであろう．

富者にとっては，霊魂の導き手が必要であること（41）．

41.1）それ故あなたが傲慢で力あり富んでいるのであれば，自らに誰か神の人を養育者また舵取り役として立てるべきである．もしあなたが一人の人に恥じ入り，一人の人を恐れるならば，そしてたとえ一人の人であっても，その人が遠慮なく話し，怯むことなく，矯正してくれる人であれば，その人に聞き従うように心掛けるがよい．2）なぜなら眼を例にとってみても，まったく鍛練を受けないままであるのは益にはならないからである．むしろ，より健全さを増すために時には涙し，痛みを覚える方がよい．3）同様に霊魂にとっても，永続的な快楽ほど破滅的なものはない．もし忌憚のない意見にも動かされることのないままであるとすれば，〔霊魂の目は〕溶けて鈍り，盲目となるだろうからである．4）その人が怒っているときには恐れよ．呻いているときには悩まされよ．怒りを止めれば恥じよ．懲らしめを求める前に与えよ．5）この人をして，あなたのために幾多の夜，不眠のまま留まらしめよ．あなたのために神に対して祈らせ，止むことのない嘆願によって父に取りなしをさせよ．というのも父は，憐れみを求める自らの子に対して拒むことをしないからである．6）彼はあなたから，神の天使の如く浄らかな尊敬を受け，あなたからは何ら労苦を受けず，むしろあなたのために心を砕くのである．これこそ偽りのない回心なのである．7）「神は嘲笑わない」（ｶﾞﾗﾃﾔ 6,7）し，虚しい言葉に一々食ってかかることもしない．なぜなら神はただ心の骨髄と神経とを試み（ｴﾚﾐﾔ 17,10），火の中にある者の声を聴き届け（ﾀﾞﾆｴﾙ 3），鯨の胎にあって嘆願をなす者の声に耳を傾け（ﾖﾅ 2），すべて信じる者には近く，神を畏れず回心をしない者には遠い方なのである（黙示録 2,23）．

使徒ヨハネと盗賊に関する物語（42；cf.ｴｳｾﾋﾞｵｽ『教会史』3,23,6－19）．

42.1）さてあなたが真に回心を体験し，あなたに救いの相応しい希望が留まるように勇気づけられるために，物語を物語としてではなく，御言葉として聞きたまえ．これは使徒ヨハネについて伝えられ，伝承に保持されたものである．2）使徒ヨハネは暴君（ﾄﾞﾐﾃｨｱﾇｽ帝；在位 81－96）の死後，パトモス島からエフェソスへと帰還した．そして彼は招きにより周辺の諸族をも歴訪し，求められればある土地には司教を立て，ある土地では教会全体を和解させ，またある土地では霊によって示された者の一人を牧者に任命していた．3）さてヨハネは，遠からぬ町の一つにやって来た．その町の名は何人かの人々が語っている．彼は兄弟たちを慰め，最後に司教として立っている者に目を注いだ．そ

して肉体的に優れたある若者，見目秀麗で霊魂においては熱意に燃える者を見つけて，こう言った．「この若者を，あらゆる真摯さを以て，また教会とキリストの証言を得て，あなたの許で庇護を受ける者とする」．司教はそれを受け入れ，すべてのことに関して約束をおこなった．使徒はもう一度同じことを託し，彼に確言させた．4）しかるのち使徒はエフェソスへ立った．一方司教は，先に委ねられた若者を家に引き取って育て，保護し看護し，ついには〔洗礼を授けて〕光を与えた．だがその後，それ以上の配慮と保護はやめてしまった．洗礼という主の封印を完全な護りとして既に与えたと考えたのである．5）しかし若者にとって，この自由は時機尚早であった．悪友たちが彼を誘ったのである．彼ら野卑で乱暴な大人たちは諸悪に慣れ親しんだ者で，先の若者を堕落の道に引きずりこんだ．彼らはまず豪勢な饗宴に彼を誘った．それから，夜の窃盗などへと彼を伴って出掛けていった．さらにその後彼らは，若者をさらに大きな悪事の共犯者とした．6）若者はこういった悪事に徐々に慣れていった．あたかも本性的に大胆な馬が，轡をはめないために力余って正しい道から外れ，とうとうはみを噛みきって穴に墜落するという様であった．7）ついに若者は神における救いを完全に無視し，もはや些細な罪はまったく気にも留めず，さらに大きな悪事を働いた．いったん堕落したからには，他の悪友どもと同じ運命に陥るのも悪くないと考えたのである．彼は青年どもを巻き込み盗賊の軍団を組織すると，自ら盗賊の長となり，最も獰猛で血に飢えた者となったのである．8）時が経ち，ある必要があって使徒ヨハネが招かれた．彼は，目的としてやって来たことどもを成し終えるとこう言った．「さあ，司教よ．わたくしどもに質を返しておくれ．わたしとキリストとが，キリストが君臨している教会を証人としてあなたに託したあの質を」．9）これに対して司教は初めはびっくりし，お金のことだと思った．そんなお金は持っていなかったので，密告されたと思い，自らが持っていないものを信ずることも，ヨハネに不信の念を抱くこともできずにいた．そこでヨハネは「わたしが求めているのはあの若者，兄弟の魂のことだ」と言った．すると司教は俯いて呻き，少しばかり涙すら見せて「彼は死にました」と言った．「どうして，どのように死んだのか」．司教は答えた．「神に対して死にました．というのも彼は悪しき人間となり破滅に陥り，ついに盗賊となって，今では教会から奪い取った山を同類の盗人たちと専有しています」．10）使徒は服を引き裂き，大きな嘆き声とともに頭を叩きながら，こう言った．「わたしが残していったのは，兄弟の霊魂のための素晴らしい守り手であったのに．わたしに馬と道案内人を貸して欲

しい」．使徒は，直ちに馬に飛び乗り，教会を後にした．11）そして盗賊たちの場所までやって来ると，その見張りに捕まえられた．使徒は逃げることも助けを請うこともせずにこう叫んだ．「わたしは，あなたがたの首領に会うために来た．わたしを彼に引き合わせて欲しい」．12）首領の若者は武具を付けて待っていたが，やって来たのがヨハネだと知ると，恥じて逃げ出した．しかしヨハネは自らの齢を忘れて全力で追い掛け，こう叫んだ．13）「なぜわたしから逃げるのか，わが子よ．わたしはお前の父だ．丸腰の老人ではないか．わたしを憐れめ，子よ，恐れるな．お前にはまだ命の希望がある．わたしはお前のためにキリストに嘆願しよう．もし必要とあらば，わが命さえもわたしは喜んで投げ出そう．主がわれわれのために死を耐えたのだから．おまえのためにわたしの魂をも引換えにしよう．立て，信じるのだ．わたしを遣わしたのはキリストだ」．14）男は最初下を向いて聞いていたが，そのうち武具を投げ捨て，それから震えつつ激しく泣き出した．近づいた老人をしかと抱き締め，可能なかぎり嘆きをもって弁明を始め，涙によって二度目の洗礼を受けたが，右手は隠していた．15）一方ヨハネは近づき，彼に救い主からの赦しが与えられたと誓いを立て，祈り，跪き，彼の右手に対して，あたかもそれが回心によって浄められたかのように接吻を与えた．そして若者を教会に連れてゆき，祈りを込めて取りなしをし，断食を続けて共に苦悩を耐え忍び，様々な慰めの言葉で若者の心を宥めた．そして若者が真に教会に戻るまで，使徒は彼を離れることがなかったと言われる．こうして使徒ヨハネは真なる回心の偉大なる範例と，再生の大いなる模範，目に見える復活の祝碑を残したのであった（※この後，テキストの欠落が想定される）．

16）〔かくして〕天使たちは喜びに満ちて讃歌を歌い，天を開きながらあなたがたを輝く顔で受け入れるであろう．そればかりではなく，救い主ご自身が真先に出迎え，受け入れて下さるであろう．そして救い主は，影のかかることがなく止むこともない光を放ち，父の懐，永遠の命，天の国に向けてあなたがたを導くであろう．17）誰であれ神の弟子たち，保証人たる神，預言者たち，福音，使徒の言葉に信を置け．彼らとともに生き，耳を傾け，かの回心に向けて行いを整え，教えの究極と証しとを見るがよい．18）というのもこの世で回心の天使を受け容れる者は，彼が肉体を後にするときに回心する要はなく，恥をかく恐れもなく，救い主をその栄光・軍団とともに目にしつつ受け容れるであろうからである．火を恐れるな．もしある人が罪をおかす度に快楽に留まったままでいて，この世での乱行を永遠の命よりも重んじ，救い主が赦しを

与えても背くならば，もはや神にも富にも額ずくことを要求するな．自らの霊魂が滅びゆくままに任せておけ．19）しかし救いを見つめかつ欲し，恥もなく全力で求めて来る者に，天におられる善き父は真なる浄めと変わらぬ命を与えるであろう．20）その父に，子たるイエス・キリスト，生ける者および死せる者どもの主によって，また聖霊によって，栄光，誉れ，力，永遠の偉大さが，今，世々，永遠にあらんことを．アーメン．

注

1　「アレクサンドリアのクレメンス『プロトレプティコス』（『ギリシア人への勧告』）―全訳―」，筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究　文藝篇』57, 1－82, 2010.3；「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴーゴス』（『訓導者』）第１巻―全訳―」，同『文藝言語研究　文藝篇』59, 1－62, 2011.3,「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴーゴス』（『訓導者』）第２巻―全訳―」，同『文藝言語研究　言語篇』59, 1－74, 2011.3,「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴーゴス』（『訓導者』）第３巻―全訳―」，筑波大学大学院人文社会科学研究科古典古代学研究室刊『古典古代学』第３号，25－76, 2011.3.「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）―全訳―」；「第１巻」（筑波大学人文社会系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究　文藝篇』第 63 巻，63－163 頁，2013 年 3 月），「第 2 巻」（同『言語篇』第 63 巻，147－223 頁，2013 年 3 月），「第 3 巻」（筑波大学大学院人文社会科学研究科古典古代学研究室刊『古典古代学』第 5 号，27－93 頁，2013 年 3 月），「第 4 巻」（筑波大学人文社会系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究　文藝篇』第 65 巻，77－158 頁，2014 年 3 月），「第 5 巻」（【改訂版】；同『言語篇』第 66 巻 57－148 頁，2014 年 10 月），「第 6 巻」（同『言語篇』第 65 巻，41－136 頁，2014 年 3 月），「第 7 巻」（筑波大学大学院人文社会科学研究科古典古代学研究室刊『古典古代学』第 6 号，35－113 頁，2014 年 3 月），「第 8 巻」（筑波大学人文社会系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究　文藝篇』第 66 巻 87－115 頁，2014 年 10 月）.

2　アレクサンドレイアのクレメンス『救われる富者は誰か』（上智大学中世思想研究所編訳／監修『中世思想原典集成１　初期ギリシア教父』平凡社），417－466 頁，1995 年 2 月.